

2026年5月17日「あなたがたのただ中に」

ルカの福音書 17章 20～30節

前回は 17章 11～19節を通して、ツァラアトに冒された 10人が憐れんでくださいとイエスに願って癒され、祭司によりきよめを認められたのに、戻ってきたのは一人だけであった出来事から学びました。

1. 神の国はあなた方のただ中に (20～22節)

- ①神の国は (20)「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。」

神の国についても教えて来られたイエスに対して、パリサイ人たちは興味本位に尋ねます。「神の国はいつ来るのですか」と。それに対するイエスの答えは、パリサイ人たちの意表をつくものでした。「神の国は、人の目で見られるようにして来るものではありません」。見える王国のようなものを想像していた彼らにはよくわからなかったことでしょう。

- ②あなたがたのただ中に (21)『『そら、ここにある』とか、『あそこにある』』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」

イエスはさらに具体的に言われます。「ここにある」とか「あそこにある」とか物的、質量的、数量的なものではないといわれるのです。そして、さらに驚くべきことに、「神の国は、あなたがたのただ中にあるのです」と言われました。この「ただ中」という言葉は「エントス」という原語ですが、「内に」とか「中に」という意味です。それでは、私たちの内に神の国があるとはいったいどういうことでしょうか。結論で考えます。

- ③人の子の日 (22)「イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます。」

ここからは少し局面が変わり、弟子達に語られています。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来る」とありますが、「人の子の日」というのは、終末におけるキリストの再臨のことと考えて良いでしょう。その日については、ある面では思いもよらない日にやってくるのです。人間の思いによって左右されるようなものではないのです。

2. 人の子の日 (23～25節)

- ①扇動に乗るな (23)「人々が『こちらだ』とか『あちらだ』とか言っても行ってはなりません。あとを追いかけてはなりません。」

扇動家は人々を惑わすのです。もうすでにキリストは来られているし、やがてこられる日についても、「こちらだ、あちらだ」といった惑わしに、右顧左眄してはならないというのです。扇動の言葉はいかにももっともらしく、それに乗りやすいのです。なによりも、弟子達のただ中に神の国はあるということを学ばなければならなかったのです。

- ②いなずまがひらめき (24)「いなずまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどその

ようであるからです。」

雷鳴は聞こえなくても稲妻はひらめいて、その電光は天の端から天の端まで届きます。人の子の日、即ち再臨の日も同じで、はっきりと見える稲妻のようにその日が来るのです。ですから、今どこそこにいるといった、不確かな言葉にだまされないよう気をつけなければならないのです。

- ③多くの苦しみを受け(25)「しかし、人の庫はまず、多くの苦しみを受けこの時代に捨てられなければなりません。」

それよりもまずは覚えなければならないことについて、イエスは述べられます。人の子、イエス・キリストは、この地上において受難されるということです。それはイエスがこれまでも述べて来られたように、十字架への道でありました。それは、その当時の時代の為政者と人々によって捨てられていくという出来事なのです。しかし、それを弟子達もよく理解していませんでした。

3. 人の子の現れる日はノアやロトの時代のように(26~30節)

- ①ノアの日(26~27)「人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日(26)に起こったことと同様です。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。」

人の子の日、再臨の日に起きることがノアの出来事から教えられます。すなわち、創世記6章から9章までに記されている、ノアの箱舟の記事は、その時代背景に基づいているのです。ノアの時代、地上は人の悪がはびこり、人が心に図ることが常に悪に傾いていたのです。彼らは、神が心を痛めていたのも知らずに、自己中心に飲食や婚姻などの生活をしていましたが、結果としてノアの家族以外は滅ぼされてしまいました。再臨の日も同じだということです。

- ②ロトの時代の出来事(28~29)「また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。」

ここでは創世記19章にあるロトの出来事が例に出されます。第二ペテロ2:7にはソドムとゴモラの民の「無節操な者たちの好色なふるまいによって」「義人ロトは悩まされていた」とあります。ソドムの民は神の御意思を無視して、欲望のままに生きたのです。その結果、これらの町にはさばきとして、火と硫黄が天から降って、人々は滅ぼされてしまったのです。

- ③人の子の現れる日(30)「人の子の現れる日にも、全くそのとおりです。」

人の子が再臨されるときも、ノアの時やロトの時と同じように、神の裁きがなされるということです。それらと「全くその通り」とあります。すなわち、人々が洪水や火と硫黄で滅ぼされたように、終わりの日には主の再臨とともに、罪に対する罰が下されることになるのです。

《展開と結論》 今朝、私たちは、「神の国はあなたがたのただ中にあるのです」(21節)というイエスのお言葉から学んでいきたいと思います。後半の主の再臨と終わりの日のことについては、次回に譲ります。

神の国はいつ来るのか、というパリサイ人の問いに対して、イエスは「神の国は人の目で認められるようにしてくるものではありません」と述べられました。これまでもイエスは神の国のことを教えられているのに、地上的に見える国を示してはこれませんでした。マタイの福音書13章では、天の御国の教えをされています。「4つの地に蒔かれ種の話」、「天の御国は良い種を蒔いた人と毒麦の話」、「天の御国はパン種のようなもの」、「天の御国は畑に隠された宝のようなもの」、「天の御国は良い真珠を捜している商人のようなもの」、「天の御国は海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引網のようなもの」と、数々のたとえ話を用いておられます。つまり、神の国がどんなところであるかは、形でなくその内容が重要であると示されているのです。私たちはパリサイ人と同じように外側を知りたいのですが、イエスは私たちに神の国の魅力を語っておられるのです。

そして、今朝の聖書箇所では「神の国は私たちのただ中にある」と教えてくださっています。これはどのように理解したらよいのでしょうか。「エントス」(ただ中)という言葉には二つの側面から理解することができます。第一には、神の国は信者一人一人の中にあるということです。「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか」(1コリント6:19)とあります。私たちがいかに汚れていても、私たちが聖霊の宮として認めてくださる限りそこには、神の国の麗しさが生きて臨んでくださると言えるのです。もったいないことですが、それを認めて歩むことが神の国の祝福を得る道なのです。第二には、「あなたがたのただ中」という言葉は、クリスチャンの集まりの中にあると理解できます。「二人または三人がわたしの名によって集まっているところにはわたしもそこにいるのである」(マタイ18:20)というお言葉に、「ただ中」というお言葉の具体的側面が示されています。キリストが見上げられている交わりの中には、神の国がそこにあると言えるのです。さらに言えば、「ただ中」を教会の中にと読むことができます。「教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです」(エペソ1:23)とありますが、現実の教会は様々な弱さや欠点を抱えていますが、そこは神の国が現われる場所であることは確かです。

終わりの日にはさばきの出来事があるのですが、一人一人も教会も、主の前に悔い改めつつ、喜ばしい神の国を実感することができるよう、ますます主との関係を深めていきたいものです。「わたしは、裸の丘に川を開き、平地に泉をわかせる。荒野を水のある沢とし、砂漠の地を水の源とする」(イザヤ書41:18)とあります。罪多き私たちですが、神の国はそのただ中にあるとお言葉を信じ、霊の実りをいただいでいきましょう。